



平成29年度

第4回 みみらんどセミナー

☆ 実施日時 ☆ 平成29年8月31日（木）

☆ テーマ ☆ 「きこえにくい子どもと自己理解（保護者）」
「ことばの育ちと障がい認識（教職員）」

☆ 講師 ☆ 宮城教育大学 准教授 松崎 丈 先生



<こどもの物の捉え方>

子どもは、周りにいる身近な大人の見方から世界のへのかかわり方を学ぶ。いろいろな人の見方が自分の中に入ってきて、自分の見方が作られる。

→例えば、犬を見て「かまれるから危ない」と言葉がけする親の元で育つ子は「犬=あぶない」という見方を持つ。「かわいいね」と言葉がけする親の元で育つ子は「犬=かわいい」という見方を持つ。

聴覚障がいに関する捉え方も同様。「聞こえにくい自分=かわいそう」という自己理解にならないように「聞こえにくい≠かわいそう」という認識のもと、子どもの自己肯定感を高める必要がある。



<自分に原因？>

「乗るはずの電車が時間に来なかった。何かあったのだろうけど、聞こえにくいために状況が把握できなかった。」という場面で、どうして情報が得られなかったのか？という問題を扱ったある聾学校中学部の話。生徒の8名中7名が、「きこえないから・話ができないから・勇気がないから」という回答をし、この問題を自分のせいと捉える傾向があった。自分のせいではないものも、それまで形成された物の見方が影響しているのでは・・・



<障がい認識とは>

障がいについての理解や対応の仕方を含めて、本人が積極的に社会参加を目指したり、自信をもった自分を目指したりすることを本人だけでなく周りの皆で営んでいくことが大切。補聴器等の外見的な違いから、聴者との音声コミュニケーションの不都合を感じるところから自分を認識し始める。



<ではどうするのか・・・>

いろいろな人の見方や考え方を知ること、自分の考え方を知り自分を理解することができるようになる。小5あたりから表面に出てくるが、それまでの過ごし方も大切。周りの大人が、先回りしすぎて、本人が気づき考えるきっかけを奪わないように配慮する。



<参加者の感想から>

- 先生の経験談を聞いて良かった。
- 自己理解のためにも、たくさんの人とのふれあいやコミュニケーションが大切なんだと思った。
- 障がい認識を育てていくことが大切だと感じた。

